

野原四郎先生年譜

1903・明治36

9・5 北海道札幌市に生まれる。

東京の高輪中学を経て

1924・大正13

旧制浦高文科丙類（仏語）入学。

この年、第1次国共合作成立。孫文、神戸で「大アジア主義」講演。

翌25・大正14年 治安維持法成立。

1927・昭和2

浦高卒業，東大東洋史学科入学。

この年4月，国共分裂，第1次山東出兵，対支非干涉同盟成立。

翌28・昭和3年3・15事件。

1930・昭和5

東大東洋史学科卒業。卒業論文は「高禰（中国古代の結びの神）について」，フランスの東洋学者グラネの説を参照した。

同級生に江上波夫，増井経夫がいる。

このころの共産党のシンパ網（赤旗購読をつうじて）東大文学部にもひろがる。

卒業と同時に史学会委員（有給）となる（1932・昭和7年まで）。

この年の秋，東大出身の若い歴史家を中心に，歴研の前身「庚午会」誕生，三島一，志田不動麿，江上波夫らとともに，これに積極的に参加。

このころ「史学雑誌」に郭沫若『中国古代社会研究』および矢野仁一『近世シナ外交史』などの書評執筆，史学会幹部から「悪」評（！）を受く。

この年台湾に「霧社事件」。

1931・昭和6

訳書，陶希聖『支那封建社会史』（四海書房）刊行。

東洋文庫で，偶然亡命中の郭沫若と会い，同氏の『中国古代社会研究』について話し合う，のち文求堂で再会。

この年9・18「満州」事変，瑞金ソビエト共和国臨時政府成立。

1932・昭和7

芳子夫人と結婚。

庚午会解散の動きおこる。

この年末「歴史学研究会」結成，三島，志田，秋山謙蔵らと積極的に参加。初期「坂巻一夫」「山川三造」のペンネーム使用。

羽仁五郎「東洋における資本主義の形成」発表（「史学雑誌」3・6・8月号）以後同氏との交わり始まる。

1934・昭和9

治安維持法違反容疑で杉並署に検挙。

「太平天国の乱」（平凡社『世界歴史大系』）

「太平天国の遣米使節」（「歴史学研究」5号 ≪以下歴研と略≫）

「ベ・ヅゥミエヴィユ「仏蘭西における支那学の発達」」（訳「歴研」14号）

この年，中国文学研究会結成。

1935・昭和10

東洋高等女学校に勤務（1年間）

書評，鈴江言一「太平天国と外国関係」（「歴研」16号）

「東洋史学界・近世社会経済史」（「歴研」25

号—歴史学年報)

「清代に於ける満支の経済的融合」(『歴研』26号)

1936・昭和11

日の出高等女学校に勤務(2年間)

「R・H・トーナー『支那の農業と工業について』」(『歴研』28号)

『東洋史学序説』(松田寿男との共著, 四海書房) 刊行。始めて概説にシナントロプスを取りあげ, また細川嘉六のマルクス主義的な近代中国の農村経済についての分析を参照した。

1937・昭和12

7・7「蘆溝橋」事件・日中戦争全面化。

1938・昭和13

回教圏研究所(所長大久保幸次)の研究員となる(敗戦まで)。

同僚に幼方直吉・蒲生礼一・岡林辰雄・竹内好らがあり, 親しく交わる。

この間アラビア語を学ぶ。このころ駒沢大学非常勤講師。

1940・昭和15

*「支那の歴史家」(河合栄次郎編『学生と歴史』日本評論社), 中国の歴史家の歴史把握の方法の特質についてのべた。

1941・昭和16

尾崎・ゾルゲ事件・太平洋戦争おこる。

「グラネについて」(『中国文学』72号)

1942・昭和17

*「回教研究の役割」(雑誌『回教圏』41)

*「アラビア系諸国における回教徒民族運動」(『同上』47)

*「メナンカバウの慣習」(『新亜細亜』4・4)

「西北支那」(『支那問題辞典』中央公論社) 始めて「延安」の問題に接した。

*「一人の近代支那史家」(『歴研』105号)

顧頡剛についてのべたもの。

1944・昭和19

*「近代回教改革思想」(『世界史講座』5, 弘文堂)

歴史学研究会活動停止

1945・昭和20

3月理由なしに杉並署に検挙さる。

8・9 戸坂潤・長野刑務所で病死。

8・15 敗戦。

9・26 三木清, 豊多摩刑務所で病死

10・10 釈放

1946・昭和21

1月歴史学研究会再建, 3月その暫定委員となる(9月まで)

4月中国研究所創立, その常勤研究員となる(1966まで)。

この年民主主義科学者協会(民科)成立, その歴史部会『歴史評論』を創刊。

*「内藤湖南支那論批判」(『中国評論』12月号)

1947・昭和22

「中国史研究の新しい方向—ウィットフォーゲル博士の最近の業績について」(『歴史評論』—以下『歴評』—9号)

「ウィットフォーゲル博士の躍進」(『中国研究月報』2号)

「東洋研究組織化の問題」(同上8号)

「中国研究のてびき—中国近代史」(『新中国』10・11号)

1948・昭和23

「中国の不孝者」（『随筆中国3』）

「胡適氏と儒教」（東洋文化講座『東洋的社会倫理の性格』白晝書院）

「中国に関する新しい論集—マックネイア編『中国』」（『中国研究月報』10号）

「アメリカの中国研究主要著作目録—主として1940年代のもの」（『アメリカの新アジア観』潮流社）

「中国における回教政策」（『近代中国研究』好学社）

1949・昭和24

中華人民共和国成立。

「1948年における中国知識分子の動き」（『知性』2-2）

「世界史の構想」（『社会科教育』25号、川崎庸之、井上幸治と野原の3名が討論したものを、川崎が「友田行夫」のペンネームで執筆）

1950・昭和25

朝鮮戦争はじまる。

歴史学研究会大会（統一テーマ「国家権力の諸段階」）の原始古代の部の議長として討論を司会。

日本歴史学協会（『日歴協』）創立準備世話人会の発起人の1人となり、副委員長に選ばれる。

歴史教育者協議会評議員となる。

1951・昭和26

サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約締結。

歴研「歴史における民族の問題」をとりあげる。

「中国現代文化の民族的形式」（『近代中国の社会と経済』刀江書院）

「中国に於ける文化財の保護について」（『歴評』32号）

「愛国詩人杜甫」（『歴評』31号）

座談会「歴研創立のころ」（『歴研』151号）に出席。

1952・昭和27

歴教協常任委員となる（—58年）

『総合世界歴史辞典』（時事通信社）今井登志喜の監修のもとに、井上幸治、川崎庸之とともに編集した。

*「中国における歴史学の発達」（『日本歴史講座』第1巻・河出書房）

始めて新啓蒙運動と顧頡剛との関係について論及。

「現代中国思想の史的概観」（『思想』5月号）

「中共の少数民族政策」（『現代中国事典』中研編）

「ルイセンコと中国農業の発展」（『アジア経済旬報』148）

1953・昭和28

『中国革命の思想』（竹内好らと共著。岩波新書）

『世界史潮』（日本出版協同）井上幸治、山上正太郎と共著。

「中国での愛国主義と歴史教育」（『歴評』42号）

「中国小学教育の発展」（『アジア経済旬報』173）

「新中国と歴史教育」（『歴史教育』1の3）

歴研大会で古代史部会の総括報告（『世界史におけるアジア』岩波書店所収）

「太平天国にかんする中国での論争」（『歴研』163号）

訳書・郭沫若『中国古代の思想家たち』（佐藤武敏、上原淳道と共訳・岩波書店）

座談会「東洋史研究の跡をたずねて—今日の国民的課題を明らかにするために」（『歴評』50号）

歴史学研究会編『太平洋戦争史』（東洋経済新

報社)全5巻の刊行にあたり、宇佐美誠次郎、遠山茂樹、江口朴郎、松島栄一とともに、編集委員となり、その編集にあたる。

1954・昭和29

『中国現代史』(岩村三千夫と共著。岩波新書)
「中国近代史研究について」(『現代中国』30)

1955・昭和30

このころから都立大学・東京外国語大学の非常勤講師。

「中国の少数民族問題」(『変革期中国の研究』岩波書店)

「胡適思想批判」(『中国経済年報』11)

『中国年鑑』(『中研』編・発行)に中国の社会科学・歴史科学の動向を執筆。以後毎年の「年鑑」に同上部門を執筆。

「中国における思想のたたかい」(幼方直吉・小島晋治らと共同執筆『中国研究月報』90号)

1956・昭和31

*「五四運動と知識人」(『世界史講座』第6巻・東洋経済新報社)

(共編)『愛と革命と青春—中国の若ものたち』平凡社

1957・昭和32

『歴史評論』85号から同誌の編集兼発行人(編集長)となる(1967年4月まで)。

「少数民族と人種問題—中国の場合」(『岩波講座現代思想3』)

「不幸なる日中関係」(『世界』2月号)

*「民本主義者の孫文像」(『思想』396号)

*「中国におけるヒューマニズムの伝統」

(『現代ヒューマニズム講座』3, 宝文館)

『集団主義と国民教育』(斎藤秋男と共編, 国土社)

ジューコフ『極東国際政治史』(平凡社)を監修。

座談会「中国近代史研究をめぐって」(『歴評』89)を司会。

1958・昭和33

文化学院講師となり、1980年入院中自ら退職を申し出るまでつづける。

「現代史研究における公式主義—中国の『昭和史』論争」(『歴評』92)

「紀元節復活の声にどうのぞむか」(同93)

「自分の位置をたしかめたい」(同96)

「中国観の反省—安保条約の改定にさいして」(同99)

「新聞を疑う—史学会総会にかんれんして」(同100)

「社会科学についての論争」(『アジア経済旬報』351)

一百家争鳴・反右派闘争の中での費孝通の主張とこれへの批判をめぐって—

「民報の停刊について」(『思想』6月)

「英米の極東政策」(『明治維新史研究講座Ⅰ』平凡社)

1959・昭和34

『世界史読本』(井上幸治と共編, 東洋経済新報社)

座談会「日本の保守主義」(『歴評』102)

対談(古島敏雄と)「歴史感覚と国際感覚」(同105)

書評「江口朴郎『歴史の現段階』」(同103)

「ソ連アカデミー版『世界史』について」(『歴史学研究月報』4号)

1960・昭和35

『日本国民の世界史』(上原専禄・江口朴郎氏らとの共著・岩波書店)

はじめは高校世界史のユニークな教科書として実教出版から刊行されたが、のち文部省検定で不合格とされ、改訂して単行本で刊行。

*「五四運動」(『アジア歴史辞典三』平凡社)

*「アナキストと五四運動」(『講座近代アジア思想史—中国近代』弘文堂)

この年、安保闘争に、大学教官・研究者集団に属して参加し、警官により負傷、共同で民事訴訟を提起、また安保問題について多くの文章を発表。

「一ついいこと」(『歴評』113)

「憲法を守れ」(同119・特集「歴史家のみた6月4日」)

「1959年の中国史学会」(同118)

「“民衆の大連合”について」(『書報』26)

1961・昭和36

「松川判決を聞いて」(『歴評』134)

「ソ連の核実験再開について」(同136)

「森本薫“女の一生”をめぐって」(『久保栄研究』4・5・6号—1963年にかけて)

座談会「世界史像形成のすすめ—“日本国民の世界史”をめぐって」(『歴評』128)

1962・昭和37

「極東をめぐる国際関係」(岩波講座『日本歴史』近代I)

「ソビエトの核実験と日本人の立場」(『世界』2月号)

訳書・ガンサー・スタイン『延安』(みすず書房)

「太平天国の乱と幕末日本」(『中央公論』77-2)

「中国では古典をどうとり扱っているか」(『言語生活』129)

「尾崎秀実の抵抗と今日的状況—『オットーと呼ばれる日本人』について—」(『図書新聞』7月7日)

座談会(羽仁五郎・犬丸義一と)「歴史学はい

かにあるべきか」(『歴評』137)

座談会(上原専祿らと)「学問の自由と国民への責任—大学管理問題をめぐって」(同145)

1963・昭和38

「国際政治のなかの中国」(『世界』)209

「“歴史評論”150号にあたって」(『歴評』150)

「五四運動と日本人」(『中国研究所紀要2』)

「“歴史”の神おろし」(『歴評』155, 特集“東洋史研究の主体性—アジア・フォード財団問題によせて”)

「“黄禍論”と中ソ論争」(『アジア経済旬報』555)

ソ連科学アカデミー『世界史』(東京図書)を江口朴郎・林基とともに監修。

座談会「歴史研究者の主体と任務」(『歴研』280号)

1964・昭和39

この年北京シンポジウム開催、その国内における準備に参加。

『中国現代史』(改訂版。岩村三千夫と共著。岩波新書)

「在野30年」(『歴評』161)

「アメリカの中共研究」(『中国』9)

「『中国革命史講義』について」(『大安』10-4)

1965・昭和40

*「回教圏研究所の思い出」(『東洋文化』38号)

「21ヶ条要求をめぐって」(中国の会編小型版『中国』20号)

「北朝鮮歴史家の“世界史”に対する批判について」(『歴評』165)

歴教協第17回大会(青森市)で記念講演「20年目の8月15日」(『歴史地理教育』65年10月号)

座談会(上原専祿・太田秀通と)「歴史認識の主体性確立のために」(『歴評』165)

「20年目の8月15日」（『歴史地理教育』113号）
『わが半生一溥儀自伝』（大安書房）を監修。

1966・昭和41

専修大学文学部教授に就任，中国研究所非常勤研究員を辞す。

著書『アジアの歴史と思想』（弘文堂）出版。それまでの若干の論文（*印のあるもの）を集めたもの。

日本歴史学協会委員に選ばれる（1968年5月まで）
この年中国プロレタリア文化大革命開始。

1967・昭和42

専修大学歴史学会発足，その代表に選ばれる（1974年3月まで代表をつづける）。発足にさいし，記念講演「中国革命の性格について」をおこなう。

和光大学兼任講師となる。

「ひとつの証言」（『歴評』200・特集「紀元節反対運動の中で」）

座談会（坂本徳松・藤島宇内と）「東アジアをどう見るか」（同197）

「革命の展開」（講座『中国』三、筑摩書房）を監修，執筆。

専修大学現代文化研究会五月例会で「現代とイスラム教」について報告。

1968・昭和43

・「義和団運動の評価に関して」（『専修史学』1号）

座談会「欧米人の革命史ルポをどう読むか」（藤井満洲男，小島晋治らと『中国研究月報』250）

1969・昭和44

講座『現代中国』全3巻（大修館）を監修，その第1巻「中国革命」に「日本人の義和団評価」を執筆。

「文学のひろば」（『文学』2月号）

「五四運動」（『中華帝国の崩壊』世界文化社）

1970・昭和45

総合研究「近代日本における歴史学の発達」発

足。その代表者となる。文部省科学研究費の補助をうく（1971年まで）。

訳書，ロジェ・ガロディ『現代中国とマルクス主義』（大修館）

1971・昭和46

「日本の東洋史学は何をしてきたか—十五年戦争にかかわって」（『近代史学史研究会会報』5号）

翻訳 可震「女子軍国主義反対論」（『専修大学人文科学研究所月報』20号）

「中国におけるコンミュニオン理解」（『中央公論』7月号）

「思想のことば」（『思想』12月号）

居住地一保谷市での「七・七不戦の誓い」で近代の日中関係について講演。

1972・昭和47

田中首相訪中，日中国交回復。

現代中国学会幹事に就任，専修大学人文科学研究所所長に就任。（1974年3月まで）

「義和団運動の評価をめぐって」（『専修史学』4号）

対談（江口朴郎と）「歴史的な見方とは何か」（『歴研』2月号）

対談（井上幸治，江口朴郎と）「日本人の外国史研究」（『歴評』12月号）

「雨乞いの祭り」（『群像』12月号）

「言語・対話・思想」（『中国古典文学大系』月報45平凡社）

1974・昭和49

1・11の専修大学での最終講義で，中国での孔子批判について見解をのべ，今後10年間の研究課題として，前資本主義社会から社会主義社会への移行の問題を解明したいと言明。

専修大学を停年退職。

「現代中国研究の動向」（『専大社会科学研究所月報』126）

「エドガー・スノー著『中国の赤い星』」（『

現代中国ブックガイド110選』満江紅)

「三島一所員を悼んで」(『中国研究月報』312号)

「すべて徹底的にやり直そう」(『野原四郎先生最終講義より』専大史学会『史学文集』第8号, 1974年3月)

訳と解説, 李大釗「経済上から中国近代思想の変動の原因を解釈する」(専大人文科学研究所月報37・38)

1975・昭和50

対談(旗田巍, 姫田光義, 増井経夫との)「アジア史研究の現状と課題」(『専修史学』7号)

「飯塚さんを偲んで」(『飯塚浩二著作集』月報3)

「古在さんの執念」(『古在由重著作集』5, 月報6)

1976・昭和51

「日中戦争前夜一矛盾主編『中国の一日』をめぐって」(『文学』44-4)

「義和団運動の評価をめぐって」(『近代日本における歴史学の発達上』青木書店)

座談会「中研創立のころ」(『中国研究月報』344号, 伊藤武雄, 岩村三千夫らと)

1977・昭和52

「抗日民族統一戦線と西安事変」(『専大社会科学研究所年報11』)

専修大学歴史学会十周年記念講演「史料批判について」(『専修史学』第10号, 1978年4月)

「李大釗とコミンテルン第五回大会」(『江上波夫教授古稀記念論集歴史篇』山川出版社)

故三島一論文集『中国史と日本』(新評論刊)編集委員となり, 座談会「三島一先生の人と学問」に参加。

1978・昭和53

著書『中国革命と大日本帝国』(研文堂)出版。1968年以降の若干の論文(・印のあるもの)に, 新たに書下した3篇の論文(「日清戦争の投影」,

「戦場におちていた日本兵士の日記」, 「海ゆかば」を加えたもの。

「日中友好大学教授訪中団—中国近代革命史の旅」の一員として, 新中国成立後, 始めて訪中, 3週間にわたり, ホンコン, 広州, 花県, 桂林, 長沙, 韶潭, 武漢, 南京, 上海を訪問, この間, 南京大学の諸先生と, 主に学問と政治の関係をめぐって卒直な意見交換を行う(旅行の感想は『研文出版』の主宰した小倉芳彦, 小島晋治との対談にくわしい)。

1979・昭和54

「尾崎秀実と西安事変」(『尾崎秀実著作集第5巻』解説, 勁草書房)

渋谷区青年教育講座講演「近代化のかかえる問題点」(『近代化と伝統』研文出版1981年)

対談(後藤均平, 西順蔵, 新島淳良, 石田米子との)「現代中国批判—中越戦争・近代化・われわれの責任」(『日本読書新聞』1979年4月2日号)

1980・昭和55

「抗日戦争中のインド医療使節団の活動」(『三省堂ぶつくれつと』28)

4月 対談(石田米子, 小島晋治, 並木頼寿, 浜下武志との)「中国近代史研究をめぐって」(近刊, 野原四郎・小島晋治監修『中国近代史』全3巻, 三省堂所収)

8月19日 1回目の発作, 警察病院に通院, リハビリ開始。

9月30日 警察病院に入院, リハビリにより, 右手のマヒしだいにとれ, 多くの知人に手紙執筆。

10月21日朝 第2回目の発作, 意識不明となる, 以後意識回復せず。

1981・昭和56

1月3日午前12時35分 逝去(病名は脳梗塞)

(文責・小島晋治)

*本年譜は「野原先生を偲ぶ会」(1981, 2, 21, 於・専修大学)にて配布されたものである。